

三位一体でつくりあげたエコ空間 四万十いやしの里プロジェクト



中村市 東洋医学の里推進室室長(当時) 長尾 亮一 氏

高知県中村市(現・四万十市)が構想・計画した「四万十いやしの里」は、3つの施設で構成される。中医学の研究や漢方治療を行う「中医学研究所」、温泉や薬膳レストランなどからなる「四万十いやしの里」、エコロジーホテル「四万十の宿」である。このうち、中医学研究所と四万十いやしの里は、中村市が事業主となって整備した。

長尾氏は、市が設置した東洋医学の里(現・四万十いやしの里)推進室長として計画の実現に尽力した。具体的な計画・建設が推進されたのは、澤田五十六市長の在任中(1996年~2005年)である。

「当時はストレスが社会問題として顕在化していた時期です。そこで中国医療を取り入れ、『心を癒せるような施設を』と計画されました。「癒し」というのは、3つの施設を合わせた事業全体のコンセプトになっています」

癒しの空間には、「市民だけでなく高知県の内外からお客様に来ていただきたい。そんな思いがありました」。遠方からも来ていただくためには、宿泊施設が不可欠である。当初は、市の事業として計画された。だが、行政である中村市に宿泊施設を運営するノウハウがあるのかどうか。

「本当にいろいろ考え悩みました。悩み抜いた結果、ホテル運営は難しいとの判断になり、建設・運営のノウハウがあるJR四国に事業主になっていただくことの結論に至りました。お願いに伺ったところ、快く引き受けていただきました。今でも大喜びしたことを思い出します」

「環境に配慮したエコロジー提案」

市が事業主の四万十いやしの里とJR四国が事業主の四万十の宿は、コンセプトの一体性が求められた。そこでJR四国と何度も打ち合わせを重ね、コンセプトである癒しの柱に、エコロジーを据えることを決めた。しかし長尾氏の悩みは続く。

「エコロジーを柱にしたものの、四万十いやしの里にどう展開していけばいいのか、具体的にどうすればいいのかわからないのです。そんな折にJR四国からエコに精通している石黒先生を紹介していただきました。石黒先生の参加により、いやしの里の計画は本格的に進んでいくことになります。コンセプトの一体性という観点から、四万十いやしの里と四万十の宿の2施設は、石黒先生が代表のペス建築環境設計に設計・コンサルタントをお願いすることになりました。石黒先生は、エコに対する私たちの思いを理想的な形で実現していただいています」

石黒氏が四万十いやしの里で提案したのは、「自然に優しい素材を活用した癒しの空間」だった。レストランの屋上緑化、壁面緑化、天窓を活用した自然採光、自然換気、入浴施設の入口に設置した100年杉の柱、